



貸しオフィス



川崎ゆきお

古いビルだ。貸しオフィスとして使われている。安アパートのように細かく仕切られている。小規模オフィスとしてなら、その狭さがちょうどいいのかもしれない。

二十歳代の高梨は起業家だ。しかし会社組織にはまだなっていない。個人オフィスレベルだ。そして、なにを起業したのか、忘れてしまうほど、こころ業種を換えている。どれも成功していないが、会社ごっこが楽しめるので、隠れ家のようにオフィスを使っている。休憩所のようなものだが、決して休んでいるわけではない。ネタさえ見つければ、すぐに新しい仕事をやるつもりだ。

その高梨が、少しだけ気になることがある。それは、この古ビルだ。建物に問題があるのではなく、同じように借りている他のオフィスが妙なのだ。中を覗いたわけではないが、非常に静かなのだ。

そして、借り主たちに覇気がない。ほとんどのオフィスは一人でやっている。

最初の頃は、高梨のような同類が出入りしていたのだが、彼と同じように失敗したのか、撤退している。そして、空いたオフィスに、ずっと、別の事務所が入っているのだ。安くて借りやすいので、人気があるのだろう。しかし、周囲にも似たような貸しオフィスはある。だが、空いている部屋が多い。その違いがよくわからない。

このビルの借り主の特長として、どこかうらぶれていることだ。ただ、服装はスーツ姿で、カジュアルな感じがない。そして、中高年が多い。中にはかなり高齢な紳士もいる。会社の偉いさんのようなでっぴりと太った人もいる。高そうな鞆を持ち、高そうなスーツを着ている。

部屋は廊下の左右にあり、ドアがかなり迫った状態で並んでいる。小さな小部屋がずらりと並んでいるのだ。そこを毎日のように高梨は通るのだが、物音はほとんどなく、また訪問客もいないのか、滅多に声は聞こえてこない。

個人事業主や、会社の分室として使っているにしても、活気がない。

高梨の左側の部屋は、二週間ほど物音一つ聞こえない。毎日来ていないのだ。右側の部屋には気配があるが、テレビをつけているのか、その音をよく聞く。また、出前を取っているのか、その応対もよく聞く。

高橋のいる階は三階で、この階だけの静けさなのかと思い、最上階の五階までの各階の廊下をそれとなく歩いてみたが、似たようなものだ。ただ、出入りは結構あるようで、出たり入ったりしている姿はよく見かける。

屋上は開放されており、そこに事務机や椅子が無造作に置かれ、休憩や運動に使われている。鉢植えがあり、世話をしている人もいるようだ。

洗濯物も干されている。

屋上の端に台がある。コンクリートがそこだけ高くなっている。それはいいのだが、

上に椅子があり、人の後ろ姿がある。屋上から外を見ているような感じだ。後ろ姿は動かない。そのため、それが人であることに気づいたときはドキリとした。あまりない絵のためだ。

「こんにちは」

即の反応ではなく、徐々に後ろ姿も気づいたのか、ゆっくり上体をひねり、途中で止め、今度はゆっくりと首が回転した。

「危ないのでね。急に動けないんだよ。なにね、落ちたって、一メートルもないけどね。手すりの際だろ。下が見えてるんでね。下手すりゃ落ちこちそうな気になる。そんなことは起こりっこないことは、承知の助なんだけどね」

長い解説だ。

「あんたも、アレかい。それにしては若いねえ。じゃ、普通に借りてる人だね」

「はい、ITとアナログを繋ぐ仕事をしています」

「あ、そう。頑張ってるね。で、一人？」

「一人です。社員もいませんし、まだ法人にもしていません」

「あ、そうなの。それがいいかもね」

「ここって、養老院のようなものですか」高梨は、本陣を攻めた気持ちになる。

「そんな年じゃないけど、その年の人もいるかね。まあ、そんなものかもしれん。あ、ちょっと体勢が窮屈なので、降りますよ」

「はい、どうぞ」

男は作田と名乗る中年男で、名刺には（作田案件研究所社長）と記されていた。

屋上の野ざらしのスチールディスクを挟んで二人は座った。

「ここはどういう人が借りているのですか。何かいわくありげなビルなので」

「建物は普通ですよ。入っている人が、少し違います」

「どう？」

「みなさんそれぞれ会社から出向しているようなものではないですかね」

「わかりました。ここは左遷用の牢獄のような……」

「それは、少しばかり失礼かもしれませんがねえ。罪人ではない人も大勢いますよ」

「じゃ、罪人もいらっしゃるのですか」

「本人のせいじゃないですよ。だから、まあ、犠牲者でしょうか」

「煙草、いいですか」

「あ、どうぞ」

「愛煙家の人が、ここで仕事をするような。そんな感じですか。仕事は良くできるが、

社内全面禁煙で、吸えないので、いらいらする。だから、こういう場所でオフィスを借りている」

「それはないです。煙草とは関係ありません。説明しましょうか？」

「お願いします」

「ここは、共同救済所なんです。私が前にいた会社も、その組合に入っていました。だから、ここにこれたんです」

「なにを救済するのですか」

「泣いてくれた人、泥をかぶってくれた人。身代わり地蔵さんたちですよ」

「あ」

高梨は作田の顔をテレビで見たことを思い出した。よく記者会見で、謝罪していた人だ。営業担当部長だったように記憶している。確か、イノシシの肉をハンバーグに入れたとかで、偽装がばれた。そのとき、矢面に立ったのが、この作田で。顔がイノシシに似ていた。最初は、イノシシの肉など混ぜていないと言っていたが、顔がイノシシだった。それがおかしくて笑った覚えがある。

それで、イノシシ部長が全責任を取り、一件落着した。本当は社長命令だったのだが、それを隠し続けた。その社長の顔は、もっとイノシシに似ていた。隠しようがないほどに。

作田の話では、こういうときの救済のため、組合に入っていたらしい。それで、退職後、仕事先が与えられた。それが、このオフィスだ。会社名はあるが、仕事はしていない。社を救った人間に対し、面倒を見ているのだ。年収は減ったが、オフィスを辞めない限り、生活には困らない。また、その気があるのなら、自分で、仕事を作ることもできる。

高梨は、それでやっと理解できた。つまり、この人は、みんな遊んでいるのだ。

「このビルにはねえ、本当に優秀な人もいるし、泥かぶり要員のつまらん社員もいる。仕事ができすぎて、やばい橋を渡り損ねた人。私もその口だが、今度ゼミナールを開こうと思っている。悪知恵なら、誰にも負けん。しかし、顔が割れておるからね。どうだろう。一緒にやらないか」

「何をですか」

「ゼミだよ」

「あのう、コンサルのようなものですか」

「コンサルなんて、全部インチキだよ。コンサルトと聞いただけで、もう駄目だよ。客が引く。だから、ゼミがいい。ゼミが。勉強会だ」

「はあ、考えておきます」

「善は急げだ」

「悪もですね」

その後、高梨は、このゼミの話はすぐには受けられなかった。なぜなら、この独房の人々から、次から次へとお誘いを受けたため、迷いに迷っているためだ。

了